

歴史学における客観性と叙述性についての研究

三宅正樹

歴史学における客観性と叙述性をめぐる論議が、アメリカのカリフォルニア大学サンタ・クルス分校の歴史学の教授ヘイドン・ホワイトの問題提起によって、ひとつの新しい段階に入った事情は、明治大学社会科学研究所年報第33号（1992年）に述べた通りである。従来、この主題についての、いわばパラダイムというべきものを確立したのが、ドイツの歴史学者レオポルト・フォン・ランケであるというのが、一般に理解されているところであり、逆にそれ故にホワイトのランケ批判がとりわけ辛辣を極めたと考えられる。そこで、今あらためてランケの歴史学、ならびに、それが欧米やわが国においていかに受容され、どのような機能を果たしたかをかえりみることは、十分に意義のあることであろう。叙述性の問題は、ホワイトにおいては、客観性を否定する素材として取り上げられている。従って、問題は客観性に収斂する。ランケにおいては、厳密な史料批判を実現することによる方法論の上での客観性の確立と、「それが本来いかにあったか」のみを探究するという、政治的なイデオロギーや世界観から自由な、歴史への研究者の態度としての客観性の確立が重要であった。これらの二つの客観性が、相互に密接に関連していることは、いうまでもない。方法論の上での客観性の確立については、ホワイトの問題提起を批判を交えつつも継承し、発展させた、アメリカのコネル大学の歴史学の教授ドミニク・ラカブラが、「史料主義型の歴史理解」として激しく批判したことも、先の報告に述べた通りである。

しかしながら、ランケの歴史学が、その後のドイツ統一達成の時点までは、ドイツ国民国家の成立への協力を至上命題とする、ドロイゼン、ジーベル、トライチュケらの「プロイセン学派」らからは、倫理的意欲を欠如した客観主義として、むしろ低く評価されていた

た事実に行き当たる。「ランケ・ルネッサンス」は、ドイツ統一達成以後の現象であった。(岸田達也『ドイツ史学思想史研究』, 137頁以下参照)

わが国では、東京帝国大学の歴史学教授として、ランケの門弟のルードヴィッヒ・リースがながく教鞭をとった結果、とくに方法論としてのランケの客観性追求の側面が移植された。しかし、ランケのなかの、むしろ叙述性にかかわる思想的な含意は、京都学派といわれる、歴史学者や哲学者によって、第二次世界大戦直前および戦時中に着目され、ランケに由来する「モラリッシェ・エネルギー」の概念などがしきりに言及された。このようなランケの歴史学の受容についても、グローバルな視野での研究を続け、歴史学における客観性と叙述性の問題の解明に貢献したいと考えている。